

スペイン語のレイラミエントの音声的実体

0 序

亀井孝先生はその昔大学院の演習において Martinet の *Economie des changements phonétiques*, Berne, 1955 をテキストとしてお使いになったらしい。たまたまその演習に出席していた、筆者の友人であり、現在岡山大学助教授の田中克彦氏はその中に出て来る *rehilamiento* とか *rehilantes* というスペイン語の術語の意味を解しかねて、筆者に葉書でその意味をたずねられた。その時筆者は極く普通の辞書で *rehilar* という動詞の意味を調べ、「この動詞にはこれこれの意味があるようです。」といった甚だ心許ないお返事を同氏にこれまた葉

原

誠

書で差上げたのを記憶している。以来このスペイン語の *rehilamiento* という術語のことは筆者の念頭から片時も離れることがなかった。それは田中氏に対してロクなお答えができなかったその恥かしさのためと、それ以後も何人かの言語学者から同じ質問を受けたことのためである。その後いくつかの関係文献を読んだり、自分で音声学的実験を行なったりした結果、ある程度まで筆者なりの考えが固まったので、東京大学の国広哲弥助教授から第六七回日本語学会において何か発表してみないかとのことご提案があったのを機会に、このテーマについて昭和四七年一月一二日関西外国語大学において口頭発表を行なった。本稿はその口頭発表をそっくりそのまま文

章に直したものであり、スペイン語のレイラミエントとは何かという問いに対する筆者なりのお答えである。

さてスペイン王立翰林院で発行した一九七〇年版の「スペイン語辞書」では、以前からそうであったのだが、相変わらず *rehlamiento* という名詞形は載っておらず、動詞形 *rehlar* だけが出ている。それによるとまずその語源は俗ラテン語の未確認想定形 **REFILARE* から由来しており、さらにこの形は「糸」を意味する *FILUM* と関係があるとされている。そしてその意味であるが、

1. 「他動詞」糸をあまりにつむぎ過ぎる、つむいだ糸をさらに撚る
2. 「自動詞」ある人または物がふるえるように動く
3. 矢などのある種の飛び道具がその格別なスピードのためにブーンと唸って飛ぶ時の形容

と三つに分けて書かれている。いま音声学上のレイラミエントがこれらの意味のうちのいずれに相当するかを強いて言うとすれば、やはり3. になるだろう。

さてレイラミエントを扱っている文献の紹介・批判に移ることにしよう。

1

G. Bes: Examen del concepto de *rehlamiento* BOLF-TÍN DEL INSTITUTO CARO Y CUERVO 19, 18—42 (1964)

この「カールおよびクエルボ研究所報」というコロンビアの雑誌は一九六〇年代までは日本では入手しにくいことで定評があった。筆者も一九六八年から同六九年にかけてユネスコのコンサルタントとしてメキシコの大学院大学エル・コレヒオ・デ・メヒコにおいて、スペイン語を母国語とする人々専用の日本語入門教科書の作成に従事していた時、同大学図書館においてこの雑誌を全巻見つけ、そのうちの何篇かの論文をフォトコピーさせてもらったがその中の一篇がこの Bes のものである。

この Bes という人、姓の綴りを見ただけですぐフランス系の人であることがわかるが、この論文はタイトルを見てもわかるようにスペイン語で書かれている。それは彼が自分でこの論文の中で触れているように、幼児の頃アルゼンチン在住期間が長かったということによるらしい。その他彼についてわかることと言えば、A. Marti-

net 編著「三宅徳嘉監訳」「言語学事典 現代言語学——基本概念五一章」東京大修館、一九七二の中の三項目を彼が担当していることによって、どうやら彼は Martinet の弟子であるらしいと推定されることぐらいのものである。

1・1 先行論文紹介

1・1・1

A. Alonso: Crónica de los estudios de filología española REVUE DE LINGUISTIQUE ROMANE 1. 171—180, 329—347 (1925)

この論文の中で A. Alonso はレイラミエントのことを「調音点に生ずる特殊な唸り」と定義し、スペイン語の [j] に対するフランス語の [ʒ] に、またスペイン語の [δ] に対する同じくスペイン語の [ð] にそれぞれレイラミエントが認められると述べた。そしてこのような新しい術語を採用しようとした理由は、すぐ次に出て来る Navarro との相談の結果、右記二音の特殊性を指示する語を必要としたからとのことである。

1・1・2

Navarro: Manual de pronunciación española, Madrid

スペイン語音声学のバイブルと言われる本である。その初版（一九一八年）と再版（一九二一年）にはレイラミエントなる語は現われていないが、第三版（一九二六年）になると、「[ʒ] 音にレイラミエントがあり、その定義は調音点に唸りを生ずる調音器官の動きである。」という句が追加されたという。

1・1・3

Navarro: Rehlamiento REVISTA DE FILOLOGIA ESPAÑOLA 21. 274—279 (1934)

この論文では Navarro は前の定義を変更して、「ある音が調音される際に生ずる比較的強く共鳴的な振動」とし、[δ] に対する [ð] に、[j] に対する [ʒ] に、また [j] に対する [dʒ] にレイラミエントがあると述べている。筆者の個人的な考えでは、この Navarro の論文は定義も相当程度改良されているし、またレイラミエントを有する音の種類もかなり明確になって来ているので大いに評価してよいと思う。

1・1・4

Lenz: El español en Chile BIBLIOTECA DE DIA-LECTOLOGIA HISPANOAMERICANA 6 (1940)

この本は Lenz が一九世紀末ごろに書いた論文のあるものを一九四〇年になって A. Alonso と R. Lida の二人がドイツ語からスペイン語に訳して一冊の書物にしたという成立経過を持っている。ところが A. Alonso は Lenz の論文を訳していづ、Schleimhautvibration というドイツ語があるのに気がついた。これは「粘膜のふるえ」という意味で、A. Alonso はこれを西訳するのに躊躇なく *rehilamiento* という訳語をあてたという。そういうわけで言わずもがなのことではあるが、1・1・1で紹介されている A. Alonso の論文を彼が書いた一九二五年には、Lenz がそれよりずっと以前に同じ現象を表現するのにドイツ語の術語を考え出していたことは彼は気づいていなかったということになる。

ところで Lenz は彼の言う「粘膜のふるえ」を起す音として [1]、[2]、[3]、[v] の四音を挙げている。このうち最初の音標文字はあまり見慣れないけれども、「歯擦音化されたふるえ音」を意味している。最後に Lenz がこの「粘膜のふるえ」に与えている定義を紹介しておく、「粘膜のふるえは、対応する無声音に完全に欠けている特徴的な音色をすべての有声摩擦音に与える」とあ

るが、レイラシエントの有無がこれでは有声—無声の対立に解消されてしまふ、無効である。なおまた A. Alonso はこの Lenz の西訳への〔付録I〕において、Lenz がレイラシエントありとしている右記四音にさらに [o] とフランス語の [3] などを加えているが、そうなると前出の [3] はスペイン語のそれということになるのであろう。

1・1・1・5

A. Alonso: La II y sus alteraciones en España y América ESTUDIOS DEDICADOS A MENÉNDEZ PIDAL 2. 41—89 (1951)

この論文で A. Alonso はレイラシエントを有する音としてさらに [Δ] を追加しているが、これは我々には全く納得のいかないところである。

1・1・1・6

Navarro: Desdoblamiento de fonemas vocálicos REVISTA DE FILOLOGÍA HISPÁNICA 1. 165—167 (1939)

この論文の中で Navarro は奇妙なことに、ある種の母音を、レイラシエントを有する音の中に含めている。これまたもちろん我々には合点のいかぬところである。

(19) スペイン語のレイラミエントの音声の実体

1・2 特徴

ここでは今まで他人の説の紹介に終始して来た *Bés* がいよいよ自分なりのレイラミエントについての定義を与えている。

1・2・1 レイラミエントありとされる音のまとめ
Bés によればレイラミエントがあると考えられるのは [ð]、[3]、[ɾ]、[v]、[z] の五音であり、その中には [ʌ] や母音などは一切含まれない。

1・2・2 調音音声学の特徴

これについては後続の 1・2・4・1・2 で詳細に取り扱うので、ここではこれだけで、次の音響音声学の特徴に進むことにする。

1・2・3 音響音声学の特徴

ここで *Bés* は「とごうようなわけでレイラミエントの特徴を音響音声学的に分析する作業は未だ行われていない。」と甚だ頼りないことを述べている。ついでに Malmberg: *Le problème du classement des sons du langage* STUDIA LINGUISTICA 6. 1—56 (1952) の p. 20. においても、「その (レイラミエントの) 調音音声学の特徴が何であろうと、レイラミエントは人間の音

声学的可能性の一般的分類の中で考慮されねばならない音響音声学のタイプのものであることは私には明らかであるように思える。またそれ (レイラミエント) を定義せねばならないとすれば、いの一に音響音声学の用語によってであるということも私には明らかである。」と述べられている。Malmberg がここで述べていることは筆者の出す結論に照らしてもあくまで正しいとは思いますが、反面そういった音響音声学的研究が当時は未だなされていなかったこともこの発言によってわかることになるのではなからうか。

1・2・4 この術語の広義の用法と狭義の用法

1・2・4・1 広義の用法

1・2・4・1・1 ここで *Bés* は「……音響音声学の見地からは (レイラミエントは) [v]、[ð]、[z]、[ɾ] の五音に共通な唸りを有していなければならぬ。」と述べているだけで、弁別の特徴の導入についてなど何ら触れていない点大いに不満が残る。

1・2・4・1・2 ここでは先行の 1・2・2 で約束したように、*Bés* のレイラミエントに対する調音音声学の定義が下されている。すなわち「(レイラミエント

は) 調音音声学的には①空氣の流れの強い摩擦、②調音点に位置する粘膜の振動、すなわち声帯の振動と共に起る振動、③はりのある調音または齒の活動または上記二つの要因、④呼気圧の増加、の四つの特徴をそなえていなければならぬ。」というのがそれで、この定義についてほだいたい満足のいくものであるように思われる。

1・2・4・2 狭義の用法

Bés はここでレイラミエントの狭義の用法とは[j]に対する[3]のことであると述べているが、たしかにスペイン語ではllまたはyと表記される[j]が[3]に移行する傾向が強いし、またこの[j]↓[3]の現象を一般には特にレイラミエントと呼んでいるのであるが、しかし純音声学的にはこういう狭義の用法ではレイラミエントなる術語の存在意義はほとんどまったく失われてしまうと云ってよいので、筆者はこの狭義の用法は有名無実であると考ええる。

1・3 スペイン語学に独自の術語

ここではタイトルが示すように、レイラミエントがスペイン語学だけに存在するユニークな術語であることが述べられる。

1・3・1 他の言語に似たような現象があるか?

この問いに対しては肯定的に答えざるを得ない。なぜなら英語には[ð]、[z]、[v]、[3]があるし、またフランス語にも[v]、[z]、[3]があるからである。それなのに実にふしぎなことであるが、次に述べるように他の言語にはレイラミエントなる術語に対する訳語がないのである。

1・3・2 この術語には訳語がない

たしかにそのとおりであって、このあと引用される Martinet にせよ、1・2・3ですでに引用した Malmberg にせよ、この現象に触れる時には、フランス語で書かれた著書または論文の中で引用符で囲って *rehlamiento* なるスペイン語をそのまま用いている。

1・3・3 この現象は他の言語では観察されたことがなかった

正にそのとおりで、色々な音声学書をひもいみてても他の言語ではたしかにこの現象が観察されたことはなかったのである。従ってこれは当然スペイン語だけに独特な現象ということになる。

1・4 スペイン語の特殊事情

それではスペイン語だけにレイラミエントなる術語が存在する特殊事情とはいったい何なのであろうか?

B_{es}によればまず音声学面においては、有声摩擦音の核心が英語・フランス語ではレイラミエントを有する諸音にあるのに対し、スペイン語では同じく有声摩擦音の核心にレイラミエントを有する音が少いという特殊事情があり、また音韻論面においては、[ð]は[θ]とともに音素[θ]を構成し、[z]は[s]とともに音素[s]（下線はいずれも舌先・歯茎音であることを表わしている）を構成し、いずれもいわゆる音素の異音であるのに対し、[ʒ]は[j]とともに音素[y]を構成し、[ɾ]は[r]とともに音素[r]を構成する、従って[θ]や[s]の場合に似ていると一応は言えるかもしれないが、実は後者は明らかにいわゆる方言異音どうしであり、前者とはまったく異質であると言える。その意味で[θ]、[s]の場合と、[y]、[r]の場合とは区別さるべきだとB_{es}は考える。しかも彼はこれこそがスペイン語の特殊事情であると主張したいらしいが、ほとんどまったく説得力がなく、後述のような理由によって筆者はB_{es}に反対する。

さらに通時的観点からすると、スペイン語のレイラミエントを有する音はその昔すべて無声化したという特殊事情があるとB_{es}は言うのだが、スペイン語にレイラ

ミエントなる特殊な術語が有効であることを説明するた
めの特殊事情とはなり得ない。

1・5 実質的な記述

この部分が事実上のB_{es}の結びのことはを形成する
のだが、そこに現われているのは実に頼りない文章ばかりである。たとえば「レイラミエントなる概念は、音声
的事実から得られるさまざまな記述や分類が実際には多
種多様で、お互い一致することなく、理論的には無限で
あることのもう一つの証拠である。」という文章である
とか、「レイラミエントなる術語は実質的諸要素の中で
その中のあるものを加え、他のものを排除するための規
準を勝ち得る可能性はけっきょくはないということを証
明している。」という文章であるとか。またこの部分に
はすでに筆者が勝手に1・2・3で引用してしまった
Mainbergの文章が引用されているが、これとてもレイ
ラミエントを定義するには音響音声学的見地からなされ
ねばならないと正しいことが述べられていながら、その
あとMainbergによってすら音響音声学的研究が何ら
なされていない現状は大いに非難されてしかるべきであ
ると思う。

要するに Bes のこの論文は彼なりにレイラミエントがあると信ずる音をいくつか列挙し、その調音音声学の定義を行なったという点にいくらか意義が認められるもの、肝心要の音響音声学的研究がなされる前に、すでにレイラミエントの定義はむずかしいなどと悲観的見解を述べている点が特に筆者の氣に入らないところである。

2

Martinet: *Economie des changements phonétiques*,
Berne, 1955

この書物でスペイン語のレイラミエントのことが何回か出て来ることはすでに 0 序のところでも述べた。以下に関係部分をすべて和訳して抜き書きしてみよう。

2・1 「3. 26. スペイン語の /y/ と /w/ …… スペイン人音声学者たちがレイラミエントと呼ぶものに相当すると考えられる器官の緊張は……」

2・2 「4. 44. レイラミエントを有する音

レイラミエントとはもともと無声性と結びついているものであり、ある場合には、スペイン語において /θ/ を [θ]

(音素 /d/ の異音) から、/x/ を [g] (/g/ の異音) から、また /f/ を [b] (/b/ の異音) からそれぞれ区別すべく調音点のわずかな違いと結びついているものである。なおスペイン語の [θ] は閉鎖をへたに行なった場合の [d] である。」

2・3 「4. 45. 円熟性^{メロウ}と粗擦性^{ストライザント}

Sp. /θ/ : [θ] = /f/ : [b] = /x/ : [g]」

Martinet がこの章で論駁しようとしているのは、スペイン語のレイラミエントに名を借りてはいるが実は Jakobson の二項対立理論なのである。Martinet によれば、Jakobson は円熟性と粗擦性のスペイン語の例として円熟性の [θ] を粗擦性の [f] と結びつけざるを得ないが、実は右に掲げたような比例式が正しいのであって、いずれも左側に音素記号を付して書かれている音がレイラミエントを有し、レイラミエントを有さない、音声記号で書かれた音と相対しているのであるという。そして更に調子に乗った Martinet は正にこの例こそ二項対立理論への反証を構成するものであり、二項対立論者が忘れていたのは、音声学の現実にあつては絶対的に粗擦的である音とか絶対的に円熟的であるような音は絶対に存在しないということであると述べている。

なるほど筆者も Jakobson 等の二項対立理論はその余りの *ad hoc* さが嫌いであり、従ってこれを悪用した Chomsky や Halle 等の生成音韻論も、特にそれが音声的実質を軽視するが故に好まないけれども、Jakobson は弁別的特徴を決して純絶対的なものとしては捉えていないはずである。それは彼と Halle と Fant との共著に成る *Preliminaries to speech analysis*, Massachusetts, 1952 の pp. 5-6 を読めば自ずと明らかである。この点については 3. の「筆者の論評」のところで改めて触れることにする。

ついでにもう少し Martinet 批判を続けさせてもらうならば、まず音素記号と音声記号との混同が気になって仕方がない。これはレイラミエントに主眼が置かれているせいなのであるが、あまり好ましいことではない。次にこれは別に Martinet に対する批判ではないが、筆者は音声記号については IPA の定めるところに従うことにしているのだから、Martinet の用いている [b] は [β] に、[ð] は [ð̞] に、[ɣ] は [ɣ̞] にそれぞれなる。Navarro の 1. 1. 3 に引用された論文で主張されているように、[ð̞] と [ð̞̞] とを混同することは望ましいことではない。この点につい

ても後述する。

次の問題点は Martinet が無声音までレイラミエントを有する音の中に含めていることである。この点についても 3. 「筆者の論評」において反論を試みるつもりである。それにしても他の音声学者はいずれもレイラミエントを有する音の中に無声音を含めておらず、その点で Martinet は独自であるという事実は注目に値する。

そういう Martinet でありながら、Economie の p. 324 の五行目では実によいことを述べている。今その部分を引用すると、

「摩擦音の [d̞] (筆者注。この [d̞] は筆者なら [ð̞] で表わすはずの音であり、「チョウツガイ」を意味する *gozne* が速く、ぞんざいに発音された際にその *z* の部分に現われる有声摩擦音である。) は /d/ の弛緩した異音と一般に混同されないという事実は、[d̞] (表記では *z*) のより強力な調音によるものかもしれない。」

とある。さらにこの部分に注 50 がついているのでついでに引用すると、

「表記の上で弛緩した摩擦音と閉鎖した摩擦音(筆者注。恐らく前者が [ð̞̞]、後者が [ð̞] であろうと推定され

る)とを区別できたら当然有用だろう。」

とある。これほどすばらしいことを言っておきながら、残念なことに Martinet はこれこそ正にレイラミエントのある音とレイラミエントのない音の対立であることを看過している。その証拠にこの 12.35. という章には一度も「レイラミエント」という術語が現われていない。

また p. 325 には「半母音の硬化現象」という句がレイラミエントとは無関係に出て来るが、これはもちろん [j] ↓ [3] の変化現象を指すものであり、レイラミエントなる音声現象に該当するのであるが、失礼ながら Martinet はこのことにも気づいていないようである。

2・4 [12.34. Alonso (筆者注。Amado Alonso のこと)はこの有声歯擦音の無声化(筆者注。これは現在アルゼンチンなどで起こっている [3] ↓ [j] の現象を指している)の中に、三世紀以前に有声と無声の摩擦音の混同にまで立ち至ったと同じ現象を見ている。すなわちスペイン語ではレイラミエントのある音は常に無声化しがちであり、反対に弱い音、つまりレイラミエントのない音はその有声性を保つということなのだろう。」

やはりここでも Martinet の場合レイラミエントに無

声音が絡んでいるように推定される。このあと Martinet は有声歯擦音の無声化がなぜスペイン語にしか起こらず、ポルトガル語やフランス語には起こらなかったかという疑問を提起して、A. Alonso の説に異論を唱えている。

そしてスペイン語に独特な有声歯擦音の無声化は下層言語としてのバスク語の影響によるものだという結論を出すのだが、この結論は D. Alonso によってその著 *Fragmentación fonética peninsular*, Madrid, 1962 の pp. 85—103 においてももの見事に論破されている。すなわちこの無声化現象はバスク語の影響が全く及ばなかった言語にも起こっているのである。従ってこの現象は Alarcos がその著 *Fonología española*⁴, Madrid, 1965 の pp. 270—278 で述べているように、過剰であった中世スペイン語歯擦音素の数の整理の一環として捉えた方がよさそうである。この問題についての詳細については原誠「近世におけるスペイン語歯擦音素の変遷について」*ロマンス語研究* 1. 15—22 (1967) および原誠「イベリヤ半島における俗ラテン語の音声分化(下)」*東京外国語大学論集* 20. 1—10 (1970) の pp. 4—5 を

参照されたい。

2・5

M. Alvar: Atlas lingüístico-etnográfico de Andalucía (1961—1964)

この膨大なアンダルシーヤの言語地図には冒頭に当然のことながら「音声表記の一覧表」が付せられている。その中で[s]という音について Alvar は「レイラミエントのある歯茎・前硬口蓋無声摩擦音」であるとしている。このことから Alvar も Martinet と同じくレイラミエントのある音の中に無声音を含めていることがわかる。しかし Alvar によるレイラミエントの定義がどこにも見当たらない以上、あまりむきになって論評しようという気にならない。

3 筆者の論評

3・1 レイラミエントの有用性

1・5において *bes* は大変頼りないことを言っていた。すなわちレイラミエントについての音響音声学的研究がなされる以前に、すでにレイラミエントの定義はむずかしいなどと悲観的見解を述べていたのである。

そこでまずレイラミエントという術語はたして本当に必要であるかどうかを原点に遡って考えてみることにしよう。音韻論の見地からすると、レイラミエントなる現象は全く無意味である。なぜならもともと音声学畑の用語なのだから。しかし音韻論的にはほとんど全く無意味であるということは、他の見地からしても無意味であるということにはもちろんならない。もし1・2・1で *bes* がレイラミエントありとして挙げている五つの音 [ð], [ɜ], [ɪ], [v], [z] (あるいはもっと他の音がこの中に加えられるかもしれない) に共通の特徴が音声学的にたしかに認められるなら、レイラミエントなる用語は存在してもよいことになる。ここで結論から先に述べてしまうならば、筆者はレイラミエントなる用語はあってもよいと思っている。その理由はまた詳細に3・2以下で述べることにしよう。

さて只今も述べたとおり、1・2・1において *bes* はレイラミエントありと認められる音として、[ð], [ɜ], [ɪ], [v], [z] を挙げていた。筆者はレイラミエントを有する音としてさらに [d₃] をこれら五音に付け加えたいと思う。直前のパラグラフで筆者が括弧をして「あるいはも

つと他の音がこの中に加えられるかもしれない。」と述べたのは、これら五音にさらに〔dʒ〕音を付け加えるための伏線だったのである。その代わり、筆者の立論からすると〔z〕音はたしかにレイラミエントを有するのであるが、残念ながら〔z〕に対してレイラミエントを有さないペヤがスペイン語に見当らず、これをレイラミエントを有する音の中から除外するのは極端であるにしても、他のレイラミエント音がそれぞれレイラミエントを有さぬペヤを持っている以上、多少不均衡な結果を招来することは覚悟せねばなるまい。ということは筆者がレイラミエントなる術語の有用性を認めるための論拠にとって、これが多少マイナスの作用をすることは謙虚に認めねばならないということになるう。

3・2 レイラミエントなる用語があってもよいという理由付け

3・2・1 まず右に挙げた六つの音の実体の吟味・検討から始めることにする。しかもそれもなるべくレイラミエントを有さぬ各自のペヤとの関連において検討して行くことにする。

最初に〔ð〕音。これには〔ð〕という弱い調音のペヤがある。

〔ð〕音の方はスペイン語では音素 /θ/ に属し、この音素が音節末に現われ、しかもあとに有声子音が来た場合に、特に速い、あまり注意深くない発音の際に有声異音〔ð̥〕が聞こえるのである。従って注意深く、ゆっくり発音された場合には、いくらあとに有声子音が来たとはいえ同化は起こらず、無声異音〔θ̥〕が現われるのである。

例。juzgar (判断する) [xuð̥ˈɣaɾ]

hallazgo (発見) [aˈjað̥ˤo]

次に〔ð̥〕音であるが、これは音素 /θ/ とは全く無関係であって、むしろ音素 /d/ の異音である。その現われ方は /d/ の破裂異音〔d̥〕との関連において説明されねばならない。すなわち休止のあとおよび〔n〕と〔l〕のあとでのみ〔d̥〕が現われ、それ以外の環境ではすべて摩擦異音〔ð̥]が現われるのである。

例。*Doy (私は与える) [ˈð̥doi]

conde (伯爵) [ˈkɔnde]

molde (鑄型) [ˈmolde]

lado (側) [ˈlað̥o]

llegada (到着) [jeˈɾað̥a]

adverbio (副詞) [að̥ˈβeɾβio]

右の六例のうちはじめの三例が破裂異音 [d] の場合であり、あとの三例が摩擦異音 [θ] の場合である。なお最後の例は異音 [ð] が音節末に現われる場合であり、これで音節末にしか現われない [ð] との比較が可能となるであろう。

けっきょく [ð] は /θ/ に、[ð] は /d/ に属するのであるから、このベヤは最小対立をなす例は皆無でありながら、一応音韻論的対立をなすことができる。これは他のレイラミエントをなすベヤには見当らない現象であってその意味で大変珍しいケースである。

なお主題からは外れるが、この [ð]—[ð] のベヤにちなんでスペイン語発音の教授法上注意すべき事象があるので、ここで述べておきたい。それはスペイン語を学び始めた学生にスペイン語の /θ/ の発音の仕方を教える際のことである。その際スペイン語の [θ] (この音のために c および z という二文字が用いられる) は英語の無声の th の発音と同じであると教えてはならない。往々にして英語の発音のじょうずな学生がスペイン語を学び始めてスペイン語の [θ] を、英語の無声の th の発音で置き換えているのを聞くが、これでは明らかに摩擦が弱く、スペイン語の [θ] の発音にならない。つまりスペイン語の [θ] は粗擦性を有

し、英語の [θ] は円熟性を有するのである。従って、筆者は具体的提案を特に持たないのであるが、IPA はスペイン語の粗擦性の [θ] と、英語の円熟性の [θ] とを記号の上で区別すべきであると考ええる。

そうなるとこれに関連して英語の有声の th は [ð] で表わさるべきか、[ð] で表わさるべきかという問題が提起されるが、英語の有声の th は、無声の th からの類推により円熟性を有するから、当然 [ð] で書き表わされなければならないことになる。しかるに例えば Stockwell, R. P., Bowen, J. D. & Silva-Fuenzalida, I.: *Spanish juncture and intonation* LANGUAGE 32. 641—665 (1956) — Readings in linguistics I. 406—418 などを見ると he dado (私は与えた) の音声表示は、[eˈðado] となっているが、これでは我々日本人はこの [ð] を粗擦性をもって発音してしまう。また英語の例えば this の場合も同様である。従って筆者は右記の二例をそれぞれ [eˈðado], [ˈðis] と表記することを提案したのである。

3・2・2 こんどは [3]—[ɰ] のベヤをとり上げる。これは、3・2・1 の /θ/—/d/ のベヤのように音韻論的対立をなすわけではなく、地方的な差を示すに過ぎない。

例えば mayo (五月)、これは普通 [ˈmajo] と発音されるのだが、人によっては [ˈmaɣo] と発音する。ただしこの [ɣ] はフランス語のそのような円唇化とは無関係である。このベヤもまた粗擦性対円熟性の対立とみなすことができる。

3・2・3 次に [ɪ]—[r] のベヤ。前者はチェコ語などに存在する摩擦音化したふるえ音であり、後者はいわゆるふるえ音であって、はじき音ではない。この点 IPA ははじき音に [ɪ] を用い、ふるえ音に [r] を用いるのでまぎらわしいと言えはたしかにまぎらわしい。このベヤもまた地方的な差を示している。例えば tierra (地球、土地、地面) は普通の場合 [ˈtjɛra] と発音されるのだが、特にアルゼンチンの一部などで、[ˈtʃjɛla] という発音を聞くことができる。この [ɪ] は [ɣ] とまぎらわしい。そこで言語構造とはよくしたもので、このように rr を [ɪ] と発音する地方では mayo は [ˈmajo] のままであって、決して [ˈmaɣo] とは発音されないのである。言うまでもないことであるが、このベヤもまた粗擦性対円熟性の対立と解することができる。

3・2・4 ここでは [v]—[β] のベヤをとりあげよう。

これまた地方的な差である。常識的にはスペイン語に [v] 音はないということになっているが、実はスペインの特定の地方にこれが残っているのである。これについての最新の情報は D. Alonso: op. cit. の p. 158 ff. に載っている。また中南米における [v] 音の再生については Isabescu, C.: Sobre la existencia de una fricativa labiodental sonora [v] en el español cubano ACTAS DEL TERCER CONGRESO INTERNACIONAL DE HISPANISTAS 473—477 (1970) を参照されたい。中南米の [v] とちがって南スペインに残っている [v] 音は音素 /v/ と表記するに値するものである。例えば普通のスペイン語では cavar (掘る) は [kaˈβa] と発音されるのだが、南スペインの一部ではこれを [kaˈva] と発音する。従ってその接続法現在 I・III 人称単数形 cave [ˈkave] は caber (はいり得る) の直説法現在 III 人称単数形 cabe [ˈkaβe] と見事に最小対立をなすことになる。従って /b/ と /v/ との対立があることにもなるのである。ところで [v] は粗擦的であり、[β] は円熟的である。しかもさきほど筆者は [v] と [β] とを地方的な差と述べたが、少くともこの地方では音韻論的対立をもなしているのである。

3・2・5 こんどは珍らしく破擦音のベヤを出すことにしよう。3・2・2の〔3〕―〔j〕のベヤが摩擦音であったのに対して、これはそれらが破擦音化した〔d₃〕―〔j〕のベヤである。これもやはり地方的な差というか個人差による対立である。つまりy、llを〔3〕と発音する人なら、休止や〔n〕や〔l〕や〔z〕や〔β〕のあとに現われるy、llの発音は〔d₃〕となるし、y、llを〔j〕と発音する人なら、休止や〔n〕や〔l〕や〔z〕や〔β〕のあとに現われるy、llの発音は〔j〕と破擦音化することである。その際破擦音であるがために観察がしにくいかもしれないが、〔d₃〕には粗擦性があり、〔j〕には円熟性がある。IPAは残念ながらこの両者を区別していないが、1・1・3に引用したNavarroの主張のように両者は区別する方がよい。ただしこの場合両者で調音点にちがいがいることに注意せねばならない。すなわち〔d₃〕を調音する際には舌尖が上の歯の裏に当るのに対し、〔j〕では舌尖は下の歯の裏に当たっているのである。最後に両者の実例を出しておこう。

※ Yo te quiero. (私は君を愛する)

〔*d₃ote'kiero〕または〔*jote'kiero〕

3・2・6 最後に挙げるのは〔z〕であって、これに對

してはスペイン語の中に相對するベヤを見つけることができない。もちろん〔z〕は粗擦性を有していて、sが他の有声音の前に置かれた時、発音が速く、ぞんざいであると、同化が起こって有声化するのである。例えば mis-mo (同じの) [ˈmismo] または [ˈmizmo] のように。

ところで3・1の末尾で筆者が述べたように、この〔z〕に相對するベヤがないことは筆者の結論にとって不利な材料となることは明らかである。しかし筆者は言語構造というものは常に整然としているわけではなく、その周辺においては必ずと言ってよいほど割り切れない部分が残るとするプラグ学派の考えを支持するものである。この点については一九七四年四月二十日(土)に東京外国語大学で開催された第十回日本ロマンス語学会大会における筆者の研究発表「ロマンス語学と構造主義」で明らかにしておいた。

3・2・7 さて〔z〕のベヤがないことにあまりこだわらなければ、3・2・1から3・2・5までのそれぞれの組み合わせで見える限り、それらは音韻論的対立と方言異音どうしという内容的異質性は持っていない、それらの中には何らかの共通性を認めることができる。思うに

どうも他の言語にはスペイン語におけるレイラミエントの、これほどまでの音声学的関与性はないようである。

これこそ正に Bes の言う意味とはちがった意味でのスペイン語の特殊事情である。しかも 3・2・1 で述べたような発音教授法上の利点もある。かようなわけで筆者は「レイラミエント」というスペイン語音声学上の術語はあってもよいのではないかと考えたのである。しかしらばその音声の実体はどのようなものであろうか？

3・3・3 レイラミエントの音声の実体

3・3・1 調音音声学上の実体

これに関しては特に筆者の創見はない。1・2・4・1・2 において Bes が挙げている四つの特徴で充分であらう。

3・3・2 音響音声学上の実体

これに関しては 1・2・3 において Bes の言と Malmberg の言が、また 1・2・4・1・1 において Bes の言がそれぞれ引用されていた。しかしいずれも甚だ頼りなくて、我々の出す結論にとってヒントとなるようなことは何も言われていなかった。ということは我々自身がレイラミエントについての音響学的実験を行わねばなら

ないということである。そこで筆者も実験音声学の權威

である東京外国語大学の吉沢典男教授のご指導の下に、ソナグラムをいじってみた。しかしこのレイラミエントに關係のある音というのはほとんど全て特殊な音ばかりなので、インフォーマントに発音をお願いするのに並外れた苦勞を要した。今ここにそれらソナグラムを転載できるとよいのであるが、印刷技術上の理由により、また本稿の紙数の制限もあることだし、残念ながら割愛した。しかしこのレイラミエントが粗擦性—円熟性という弁別の特徴に關係が深いことは、音響学的実験を行わなくても、Martinet の *Economie* の 4.45. の題名が「円熟性^{ストライプ}と粗擦性^{ストライプ}」となっている（本稿では 2・3 に引用されている）ことからだいたい察しがつくのである。もちろんこの章で Martinet はレイラミエントのことを右記の弁別の特徴と関連づけて述べているのである。もっともこの件に關する Martinet の言を信用しないというのであれば、話は全く別になって来る。

なお筆者はソナグラムに出て来るいわゆる声紋を自ら判別する能力に欠けているので、念には念を入れて、昭和四十三年、当時都下田無市にあった通産省電気試験所

に梅田規子女史を訪れて実験結果をお目にかけたところ、やはり「円熟性―粗擦性」という弁別の特徴が看取できるといふご判定をいただいた。

そうなると当然レイラミエントは「粗擦性」と同じかという疑問が起こって来る。もしそうだとすれば筆者はレイラミエントなるスペイン語音声学上の特殊術語は全く不要だろうと考える。

そこでレイラミエントは「粗擦性」に恐らくはもう一つ何らかの特徴が加わったものでなければ、存在意義は皆無ということになる。この謎を解くのに深く関係して来るのが、本稿の2・2に引用されているMartinetの言および同じく2・5に引用されているAlvarの「音声表記の一覧表」の一部である。つまりここで問題となるのは、レイラミエントを有する音の中に無声音を含めてもよいのかということである。Besはこれについて何と言っているかちょっと復習しておく、1・2・4・1・2においてレイラミエントの調音音声学的特徴の②として「声帯のふるえと共に起るふるえ」ということを述べている。筆者はこの件に関してはMartinetやAlvarの考えよりもBesのそれに賛意を表したい。その理由

は、レイラミエントを有する音の中に無声音をも含めるとなると、全ては「粗擦性」という弁別の特徴によって解決されてしまい、レイラミエントという術語は不要になるからである。ということはつまりレイラミエントなる語自体の存在意義すら失わしめるほど大なる混迷の状態に落ち込むであろうということでもある。

4 結論

けっきょく「レイラミエント」というスペイン語音声学上の術語はあってもよいという結論になった。しかればその音響音声学の実体は何かというと、「粗擦性」と「有声性」という二つの弁別の特徴の複合体であろうと思われる。ただしこれはレイラミエントの音声的実体の必要条件であって、十分条件ではない。筆者の考えではChomskyやHalleによって唱えられた生成音韻論の第一の欠陥は、これら弁別の特徴を、彼等が認めていないながら蔭でこっそり用いているところの音素の十分条件として使用したことにあると思われる。これらはあくまでも必要条件でしかないことを常に念頭に置いておかないと、へたをすると二項対立理論の存在それ自

体が疑われるほどの誤解を受けかねないと思う。要するにあるいは余剩的かもしれないが、本当は決して余剩的ではないところの音声の実質を重視すべきであるということ強調したかったのである。

(東京外国語大学助教授)